

Title	ソグドとバクトリアにおいてアヴェスターのヤシュトは知られていたか—図像学的資料による検討—
Author(s)	Grenet, Frantz; 影山, 悦子
Citation	内陸アジア言語の研究. 10 P.85-P.100
Issue Date	1995-07
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/18090">http://hdl.handle.net/11094/18090</a>
DOI	
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ソグドとバクトリアにおいてアヴェスターの  
(訳者注1)  
ヤシュトは知られていたか  
——図像学的資料による検討——

F. グルネ  
影山悦子 (訳)

Frantz Grenet

“Знание Яштов Авесты в Согде и Бактрии по Данным  
Иконографии”, ВДИ, 1993/4, pp.149–160.

В.П.アレクセーエフがソ連科学アカデミー考古学研究所所長に就任すると同時に、サマルカンドの、ソビエト・フランス調査団が設立された(この調査隊は現在ではウズベク・フランス考古学調査団となっている)\*。これは我々にとって本当に幸いなことであった。В.П.アレクセーエフは、この計画を熱意をもって受け入れてくれたが、彼の熱意と助言及びアイディアは、かけがえのないものであった。丸三年間ソ連とフランスとにおける我々の協力関係は継続し、В.П.アレクセーエフは、ソビエト・フランス調査団にたいへん深い関心を示してくれた。私の友であり、また優秀な研究者でもある彼の追悼のために捧げられるこの雑誌の月号に、論文を発表することができるのは私にとってたいへんな名誉である。古代の神話やインド・アーリア民族の移動の問題は、彼の興味の範囲に含まれていた。この論文で検討される諸問題が、В.П.アレクセーエフにとっても興味深いものであることを願っている。

ゾロアスター教という宗教は、儀式という形でも、聖典という形でも、具体的にその存在を把握することができる。ゾロアスター教を構成するこの二つの

---

\*. 現在 F.Grenet は、この調査団のフランス側の団長である。——編者注

要素は、その中で密接に結びつきあっている。アヴェスター語の聖典の言葉を声に出すことは、《天賦の才能》であり、通常種々の祈祷の儀式の中で行われる。また、日常生活における宗教儀式、さらには敬虔な故人の身体を取扱いや、信者による悪霊の追放などは、アヴェスターの多くの部分で詳しく記述されているが、とりわけウィーデーウダート書に多く見られる。

イスラム化以前の人々にゾロアスター教がどれほど普及していたかを判断する上で、西トルキスタンの考古学者が、まず第一に遺物から分かることを根拠としたのはもっともなことである。我々は、墓地遺跡、建築物、神殿の装飾、家財道具、そしてとりわけ、家庭のかまどを、そのような遺物と考えた。

聖典の使用の普及とその程度を研究することは、はるかに困難である。なぜならば、西トルキスタンの地質条件の下ではテキストが保存されることは、たいへん稀であることを考慮にいれなければならないからである。ペンジケントの宮殿の発掘作業によって、いくつかの《札》<sup>ふだ</sup>が発見された。それは陶器のかけらに書かれた寄進者の献詞である。<sup>(1)</sup>パミールとカスピ海間の地域では、イスラム化以前の宗教の聖典としてはザンダ・テベ(西トハリスタン)とメルブ出土の仏教写本の断片があるが、これらのごく例外的なものである。さらにペンジケントでも、陶片に書かれたシリア語の詩篇が発見されている。<sup>(2)</sup>したがってこれらのテキストは、どれも外来の宗教のもので土着の宗教とは関係していないのである。<sup>(3)</sup>

周知の通り、東トルキスタンでは文書の保存条件ははるかに良好である。しかしそこでも、仏教、マニ教、さらにキリスト教の寺院で、各々の宗教の文献

---

(1) Лившиц, В. А., Шкода, В. Г., “Согдийские надписи из храма I в Пенджикенте”, *НАА* 5, 1982, pp. 131-141.

(2) Воробьева-Десятовская, М. И., “Памятники письмом кхароштли и брахми из советской Средней Азии”, *История и культура Центральной Азии*, Москва, 1983, pp. 63-86.

(3) Пайкова, А. В., Маршак, Б. И., “Сирийская надпись из Пенджикента”, *КСИА*, 1976, 147, pp. 34-38.

が発見されているにもかかわらず、ゾロアスター教の寺院で文献が発見された  
ということはない。しかしそれが存在していたことについては、様々な証拠が  
ある。<sup>(4)</sup>

ところで、東トルキスタン出土のソグド語テキストのいくつかには、ソグド  
人にアヴェスターのいくつかのパッセージが知られていたというわずかではあ  
るが、しかし疑う余地のない証拠がある。第一の証拠は、ソグド語テキストの  
中に、西イラン語からの借用語ではなく、本来のソグド語の単語である pncw  
γ'dh が存在することである。それは「5つのガーサー」、すなわちアヴェスター  
の最も神聖な部分で、ゾロアスター自身の手によると考えられる唯一の部分  
を意味する。<sup>(5)</sup> 第二に、あるマニ教テキストの中に、アヴェスターの祈りの言葉で  
あるアシム・ウォフーが含まれているという事実がある。しかもそれは古風  
なソグド語で伝承されている。<sup>(6)</sup> そして最後に、ソグド語文献の中には、ハー  
ゾークト・ナスクに似た2点の断片が存在する。ハーゾークト・ナスクとは、  
アヴェスターの賛歌であり、敬虔な人の魂をあの世へ導く道について述べてい  
る。一つは密教風の呪術に関するテキストであり、<sup>(7)</sup> もう一つはマニ教の説話の  
中に見られる。<sup>(8)</sup>

ソグド人がアヴェスターを知っていたことを示唆する典籍も、わずかではあ  
るが存在している。パフラヴィ語の作品『シャフリスターンハー・イ・エーラー

---

(4) Чугуевский, Л.И., “Новые материалы к истории согдийской колонии в районе Дуньхуана”, *Страны и народы Востока* 10, 1971, pp.152–153 ; Leslie, D.D., “Persian Temples in Tang China”, *Monumenta Serica* 35, 1981–1983, pp.275–303.

(5) Henning, W.B., “A Sogdian God”, *BSOAS* 28, 1965, p.251.

(6) Sims-Williams, N., “The Sogdian Fragments of the British Library”, *Indo-Iranian Journal* 18, 1976, pp.46–48 ; Gershevitch, I., “Appendix”, *ibid.*, pp.75–82.

(7) Benvenist, E., *Mission Pelliot en Asie Centrale, III : Textes sogdiens*, Paris, 1940, pp.68–69 (=テキスト 3, 203–219) ; Henning, W.B., “The Sogdian Texts of Paris”, *BSOAS* 11, 1943–1946, p.729. (風の神を賛辞する部分で、ハーゾークト・ナスク2.7–8に類似する)

(8) Henning, W.B., “Sogdian Tales”, *BSOAS* 11, 1943–1946, pp.476–477. (ダエーナの記述で、ハーゾークト・ナスク2.9–15に類似する)

ンシャフル] *Shahristān* hā i *Ērānshahr*によればマケドニア人であるアレクサンダーは、サマルカンドを征服し金の板に刻まれたアヴェスターのテキストを破壊した。<sup>(9)</sup>これは伝説であるが、ササン朝ペルシャのゾロアスター教徒がソグド人にアヴェスターの知識があると認めていたことがこれによって証明されるのである。

イスラム化以前には、アヴェスターのテキストは主として口伝の形をとって伝承されたこと、そしてゾロアスター教が国教的地位を得ていたササン朝ペルシャにおいても、同様に口伝であったことを忘れてはいけない。アヴェスターを文字化することは、4-5世紀になって行われた。その写本はたいへん限られた数量しか存在せず、マニ教、キリスト教仏教の教団で使用されていた各々の聖典よりはるかに少なかったのである。

アヴェスターのテキストが西トルキスタンに及ぼした影響をより正確に判断するために、文献資料の検討はこれくらいにして、ソグドディアナとバクトリアにおける神々の図像の検討に移ろう。多くの場合神々の像とヤシュトの記述には、正確な類似が見られる。様々な神々に捧げられた21の賛歌は、文体の観点からすれば、アヴェスターの中で最も魅力的な部分である。この資料は今日では、И.М.ステプリン・カーメンスキーの正確かつ詩的な翻訳のおかげで、ロシア人にも容易に利用できるようになっている。<sup>(10, 訳者注2)</sup>

カニシカ王の貨幣に打ち出された勝利の神ウルスラグナ *Vərəθraγna* (バクトリア語ではオルラグノ *ορλαγνο*) の像は、以前から知られていた(図1)。彼の姿と権力を象徴する持物は、クシャン朝の支配者のそれと一致している。一致していない点は羽を広げて冠を飾っている猛禽の存在である。既に100年前にA.スタインは、この鳥がその神の化身の一つであると推測しているが、このこ<sup>(11)</sup>

(9) Markwart, J., *A Catalogue of the Provincial Capitals of Ērānshahr*, Roma, 1931, pp.8-9 (§4-5).

(10) Стеблин-Каменский, И.М., *Авеста. Избранные гимны*, Душанбе, 1990.

(11) Aurel Stein, M., "Zoroastrian Deities on Indo-Scythian Coins", *Oriental and Babylonian Record*, August, 1887, p.89 ff.

とはウルスラグナに捧げられたヤ  
シュトにも記されている (ヤシュ  
トXIV. 19).

アフラによって創造された  
ウルスラグナは7度目に  
ゾロアスターに現れた。  
ワールガン鳥のように飛んで  
下から獲物捕らえつつ  
上からは獲物を破碎しつつ  
すべての鳥の中で最も速い  
飛ぶものの中では最も軽快なものは。



図2. フヴィシュカ王金貨のイアマショー神 (「イマ王」)

詩中の描写によれば、ワールガン Vāreḡan という鳥はタカである。この比定はその外見の描写と、幾つかの西トルキスタンの言語中の同じ語源の語の意味からも支持される。

この鳥の図像は、フヴィシュカ王の貨幣にも現れる (図2)。私は数年前に発表した論文の中で、この貨幣の図像にたいして、以下のような解釈を提案し<sup>(12)</sup>た。すなわちその鳥は、戦いのために鎧をつけ頭には王冠を頂いた人物の腕輪の上にとまっている。その人物の名は銘文によればイアマシヨ *iamšo* で、「イマ王」を意味する。しかもこの絵は、イマの伝説の中の一つのエピソードを図示したものである。その伝説は、王権と幸福の象徴であるフワルナ *xvarənah* の賛歌に記されている (ヤシュトXIX.34-35)。

この虚偽  
真実ならざる言葉を  
おのが心に抱きしとき  
鳥の姿してフワルナは

(12) Grenet, F., "Notes sur le panthéon iranien des Koushans", *Studia Iranica* 13, 1984, pp.253-258.

イマより目に明らかに飛び去りし。  
フウルナの鳥の如く  
飛び去るを見たるとき  
すばらしき畜群の保持者なる  
輝くばかりのイマは  
心喜ばず彷徨し  
敵から逃れて  
大地に隠れたり。  
初めフウルナ  
イマより離れしとき  
そはウィワフワントの後裔なる  
イマより去りたり  
ワールガン鳥の如く飛翔して。

正統派のゾロアスター教の伝説によれば、イマは英雄であり王の先祖である。しかし神像以外は表現されないクシャンの貨幣の裏側に、彼が描かれているという事実から、バクトリアでは、彼が神性を有していたことが判明する。彼は冥界の神であった可能性が高い。さらに西トルキスタンにおいてイマが神であったことを証明するのは、エフタル時代の印章にある銘文である。その銘文は固有名詞《φριουταμπο<sup>(13)</sup>》と読まれる人名で、これは「(神である) イアムショーに好まれた」を意味する。従って教義的には矛盾はあるのだが、フヴィシュカ王の貨幣の図像から、イマとフウルナ鳥に関する伝説が、イラン世界において類似した形式で知られていたことが分かるのである。

次の絵(図3)は、バクトリアに隣接する地域であるバーミヤーンで発見された。この壁画は、二体の巨大な仏像のうちの小さい方の像の頭上にある丸天井

---

(13) Göbl, R., *Dokumente zur Geschichte der iranischen Hunnen*, Wiesbaden, 1967, IV. Taf. 86 (G.34) (この銘文は Sims-Williams によって解読された。筆者はこの情報に心より感謝の意を表す。)

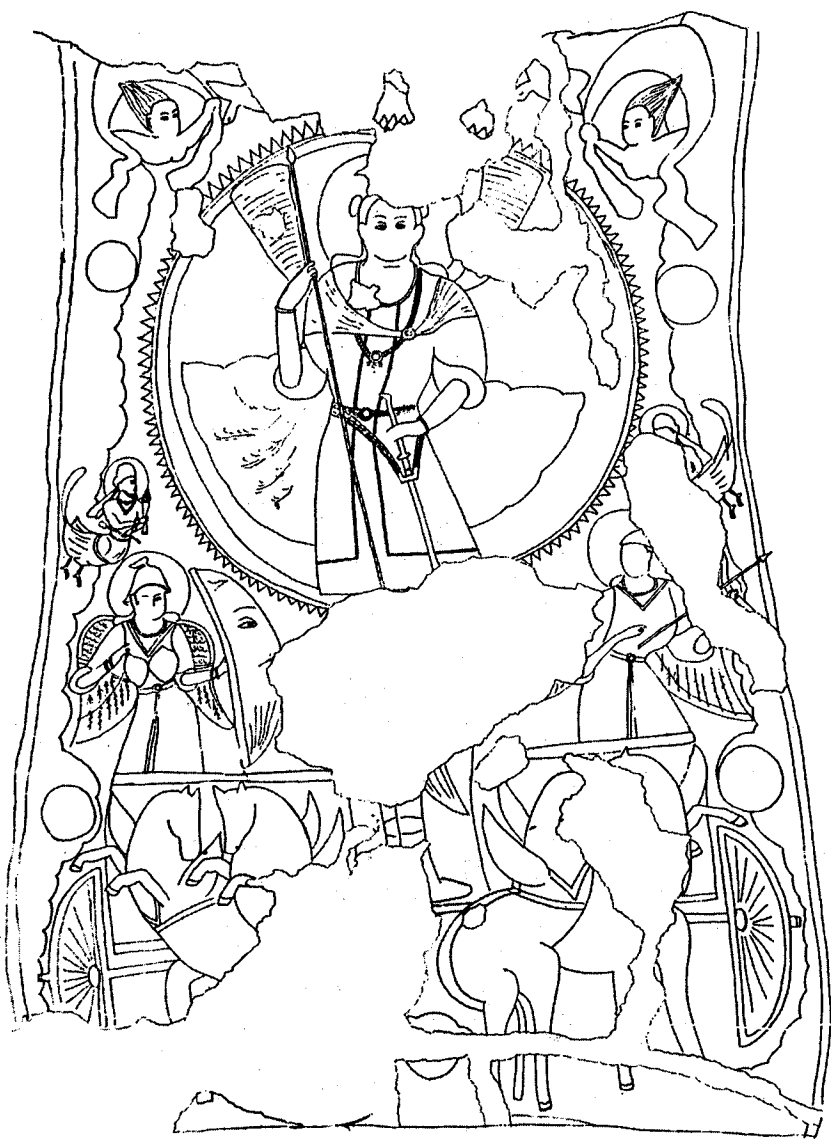


図3. 仏陀の頭上に描かれたミスラ像(バーミヤーン)



の飾りであり、その年代はおよそ7世紀のものとされている。この構図の中心部分のテーマは、仏教起源のものではないし、インドの太陽神であるスーリアの標準的な図像ともかなり違<sup>(14)</sup>う。ここでは明らかに太陽という戦闘用二輪馬車に乗って疾走しているミスラが描かれていて、ヤシュトXの記述とよく一致している。

(102) :

我々はミスラを祭る  
その馬白く  
その槍鋭く長さ(ものを)。

(124-125) :

力強きミスラは  
明るい称賛の家の中から  
軽々と運ぶ  
金で飾られた戦車を  
美しく、素晴らしい(戦車を)。  
この戦車を  
牽くのは四頭の白い馬  
それらは霊の銅葉を食べ  
不死にして速きもの。

この絵の中の二つの場面をより詳しく見てみよう。この二つは私の知るかぎ

---

(14) Rowland, B., "Buddha and the Sun-god", *Zalmoxis* I, 1938, pp.69-84 ; Tarzi, Z., *L'architecture et le décor rupestre des grottes de Bāmiyān*, Paris, 1977, I, pp.4-6, 128 ; II, Pl. A1 ; Шкода, В., "К вопросу о культовых сценах в согдийской живописи", *СГЭ* 45, 1980, pp.60-63. (注16参照) ; Klimburg-Salter, D., *The Kingdom of Bāmiyān; Buddhist Art and Culture of the Hindu Kush*, Naples-Rome, 1989, pp.128f. (Klimburg-Salter, D.はバーミヤーンの構図を他の二人より正確に再現している。左側の女神の盾にある人間の顔の描写に注目しよう。これには Klimburg-Salter さえも気付いてはいないが明らかに、アテーナーの盾にあるゴルゴンの顔と同じものである。我々はこの部分をここではっきりと図版化することができた。

りでは、これまで誰も検討したことがなかったものである。

第一に、ミスラに関するヤシュトのテキストから、この場面の脇役の人物が明確に説明される。壁画において風神の像の下には、たいまつを持つキンナラのような2匹の生き物が見える(図4)。これは、ヤシュトXの第127節の図である。

ミスラの前に

燃え盛る火が飛ぶ。

それは、カウイのフウルナなり。

羽を持つ二柱の女神が、馬車の中で両端から神を取り囲んでいる。彼女らの外見は、スーリヤの伴侶であるウシャスとプラティウシャスには似ていない。(絵に向かって)左側の



図4. 図3の細部：たいまつを持つキンナラ、アルシュタート神

ものは、アテナ神の外見をしている。西トルキスタンではこのギリシャの女神は、イランの正義の女神であるアルシュタート arštāt と同一視されていたことが今日ではよく知られている。同様の図像が、いくつかのフヴィシユカ王の貨幣にも見られる。そこではアルシュタートの名が、リシュト  $\rho\iota\beta\tau\omicron$  とバクトリア語で記されている。<sup>(15)</sup> アヴェスタでは、ミスラとともにラシュヌ神が記述されている。ラシュヌという名は「判事」を意味するのであるから、彼をほとんど同

(15) Grenet, F., "Notes sur le panthéon iranien...", pp.258-262; idem(ed.), "L'athéna de Dil'berdžin", *Cultes et monuments religieux dans l'Asie centrale préislamique*, Paris, 1987, pp.41-45. Rowland, B. は既にパーミヤーンの女神をアテナと対比している(前掲書 p.82)。しかしながら、中央アジアではアテナがアルシュタートと同一視されることは知らず、パーミヤーンの図像はイランの女神アシであると推測している。

じ意味の呼び名の神と取り替えることは驚くにはあたらない。この詩には、「知性」を意味するチスター cištā 女神も言及されている。向かって右側のアルシュタートと対称的な位置に描かれている絵はチスター神のものであるに違いない。

(ヤシュト X 126) :

ミスラの右を飛ぶのは  
最高に真っ直ぐ神々しい  
最高に高く成長したラシュヌ。  
左を飛ぶのは「知性」で、  
(それは) 最高に直く神々しい。

ミスラの同伴者とたいまつを持っている生き物が、飛んでいる姿で描かれていることは注目される。このことは、テキストの中でも実際に言明されているし(vazaitē, vazata), 絵の中でも明らかである。パーミヤーンの画家は聖典(アヴェスター)に忠実であったので、アテナ・アルシュタートに羽をつけたのである。そのようなことはギリシャの作品では決して見受けられない。

第2は、パーミヤーンの地理的位置に関係する。この絵に巨大なミスラが現れることは、何よりもまずこの地形に関係がある。というのは、向かい側にはコーヘ・バーバー山があり、それはイシュカタ iškata とみなすべきであろう(イシュカタは、ミスラが朝焼けとともに神話上のハラー Harā 山から天空の旅を始めたとき、最初に見た国である)<sup>(16)</sup>。パーミヤーンの名は(古代イラン語の bāmya 「輝く(形)」の派生語である)、日の出の時に岩を照らす光と関係がある。この bāmya という単語はミスラの住む所の記述の一節において実際に用いられている(ヤシュト X. 49-50)。

---

(16) Marquart, J., *Untersuchungen zur Geschichte von Ērān*, 2nd vol., Leipzig, 1905, pp.73-74; Gershevitch, I., *The Avestan Hymn to Mithra*, Cambridge, 1959, pp.174-176; Bernard, P., Francfort, H. P., *Etudes de géographie historique sur la plaine d'Ai Khanoum (Afganistan)*, Paris, 1978, p.20; Gnoli, G., *Zoroaster's Time and Homeland*, Naples, 1980, pp.84-87.



図6. ペンジケントにある建物 (XXV/28) の壁画 (下方部分)

我々はミスラを祭る…

彼のために住居を

アフラマズダーは作りたり。

高きハラーの上に

多くの支脈もち輝ける (その山の上に)。

(pou. fraorvaēsyam bāmyam)

(17)  
最近の研究論文によれば、ササン朝の東部地方に由来する印章には、ハラー山の山頂から昇った瞬間の太陽の光輪のなかにミスラが描かれているという。この絵の構成のほうがより単純ではあるが、パーミヤーンの壁画と多くの共通点を有する (図5)。

次の絵 (図6) は、ソグドの壁画の中では広く知られているものである。これは、男女の神々のペアである。厳かにラクダに座っている神と、厳かに雄羊に

(17) Callieri, P., "On the Diffusion of Mithra Images in Sassanian Iran. New Evidence from a Seal in the British Museum", *East and West* 40, 1990, pp.79-98.

座っている女神である。B.И.マルシャークとB.И.ラスポーボヴァは、この神をウルスラグナ(ソグド語では *wsyn'*)に比定することを提案し、その理由としてラクダがウルスラグナの化身の一つであることをあげている。<sup>(18)</sup> この仮説は魅力的である。しかしながらこの比定にはいくつもの矛盾がある。第一に、男神の外見は全く勇壮ではない。ベルトに付けている剣さえ、ソグドの貴族に付き物の剣となんらかわらない。上で論じたクシャン朝のウルスラグナの像の方が、はるかに戦闘的に見える。またカシュカダリヤ出土のオッサリ(図7)に描かれている、鷹のついた花冠を戴き鎧を着て盾と矢を振りかざしている神のほう、それよりさらに好戦的である。筆者はこれを、むしろウルスラグナに<sup>(19)</sup>比定しようと思う。

さらに聖典(アヴェスター)には女神がウルスラグナに随行するとは書いてはいない。だとするとむしろ、「ラクダに騎乗した神」と「雄羊に騎乗した女神」は夫婦の図であろう。マルシャークとラスポーボヴァは、この女神を同定する際に3つの交替案を提出している。それらはどれも、アヴェスターの神々の中ではあまり重要でない神々である。すなわち、ワナンティー *vanainti*「勝利」、チスター「知性」、アーフリーティ *āfrīti*「祝福」である。これはある意味では矛盾している。なぜなら「雄羊に騎乗した」女神の像は、その伴侶を伴う場合も伴わない場合もあるが、ソグドではナナに次いでよく流布していたからである。<sup>(20)</sup> 西トルキスタンの重要な女神であることと、彼女を守護するものがまさに雄羊で

(18) Marshark, B.I., Raspopova, V.I., "Wall Paintings from a House with a Granary. Panjikent. 1st Quarter of the Eighth Century A.D.", *Silk Road Art and Archaeology*, I, Kamakura, 1990, pp.137-145, Fig.16-17; *ibidem*. "Cultes communautaires et cultes privés en Sogdiane", *Histoire et cultes de l'Asie centrale préislamique*, Ed. Bernard P., Grenet, F., Paris, 1991, pp.188-189, Note 7, Fig.1.

(19) Лунина, С.Б., Усманова, З.И., "Уникальный оссуарий из Кашкадарьи", *Общественные науки в Узбекистане* 5, 1985, pp.46-51.

(20) Щкода, В., "К вопросу о культовых сценах..."; Мешкерис, В.А., *Согдийская терракота*, Душанбе, 1989, pp.253-254, Fig.147. (この女神のより原始的な描写); pp.269-271, Fig.163. Marshak, Raspopova, *op.cit.*; Grenet, F., "Note additionnelle sur les panneaux mythologiques du palais de Kujruk-tobe (Keder)", *Studia Iranica* 21, 1992, p.46. Fig.7, 9-10.

あることを考慮して、もしもこの女神がアシ aši, すなわちクシヤンのアルドクシヨ αρδοχρο であると推定するならば、この像がこれほど流布していたことを説明するのは容易である。ここで筆者は、アシのヤシュトを引用することに  
する。(XVII, 55-56)：

さて、アシは言った。

私を追い出した

トゥーラーン人と

速き馬持てるナオタラ家のものたちは。

私は身を隠した

百匹の群持てる

雄羊の首の下に。

アヴェスターには2度、アシとフワルナ神と一緒に、家の保護者として登場する。ここでは、ヤシュトXVII, 6を引用する。

美しきアシよ

光輝くアシよ

人々のために至福をもたらす者

良きフワルナを<sup>(21)</sup>

汝がつき従う人々に与える者

(彼らの)家は良き香りを発す。

アシとフワルナはバクトリア語ではアルドフシヨとファツロ φαρρο の名で知られているそれらはガンダーラ芸術のなかでは、相伴って描かれた。おそらくその一対は銘文のついているアイルタムの彫刻にも現れている。<sup>(22)</sup> 従ってラクダ

(21) Стеблин-Каменский, И. はこの部分に〈славу 名誉〉という訳語を当てているが、テキストには、〈xvareno〉と記されている。

(22) Harmatta, J., "The Bactrian Inscription of Ayrta'm", *Studia Grammatica Iranica. Festschrift für Helmut Humbach* / Ed. Schmitt, R., Skjaervo, P.O., München, 1986, pp. 131-146. Harmatta, J. が提案した銘文の読みは疑わしいけれども、彫刻の痕跡の解釈は、ガンダーラ芸術のいくつかの作品によって部分的に確認されている (Ф. Тиссо からの口頭の情報による)。



図8. ペンジセントにある建物 (XXIV/13) の壁画

に騎乗している神像を、現世利益の神でもあり戦いの守護神でもあるフワルナであると考えすることは、筆者には可能であると思われる。彼はウルスラグナの助手であるから、その化身の一つを借用することができるのである。フワルナのために「玉座」の役目をしているラクダの像は、筆者の見限りでは、形容辞 *barō.xvarenah* すなわち「フワルナを運ぶ物」を何よりも正確に説明している。その形容辞はアヴェスターの2つの節 (ヤシュト XIV, 2 及びウィーデーウダート XIX, 39) でウルスラグナに関して使われている。<sup>(訳者注4)</sup> もしソグドの神々の中で最も人気のある1対の神が、アシとフワルナであるとすれば、ペンジセントの豪華な家の壁画で、彼等に随行している脇役的な登場人物にも正確な説明を与えることができる。XXVの区画にある家の応接間を飾っている絵では、神像の前にそれほど大きくない女性の登場人物が、両肩にワインの入った革袋を乗せて<sup>(23)</sup> 運んでいる。この豊饒のシンボルは、とりわけソグドのようなぶどう酒醸造の

(23) Marshak, Raspopova, op.cit., Fig.17.

さかんな国では、幸福の神の取り巻きと無関係ではあるまい。彼女はガンダラにおいても、しばしばファッコと同一視されるパーンチカ神とともに描かれている。さらにベンジケントのXXIVの区画にある建物の絵(図8)では、1対の神々が星のシンボルと、あまり大きくない天人を従えているが、彼らは皮袋から雲を流し出している。この構図は、アヴェスターのある一節を読むとその内容が良く分かる。その一節は本来はアシに捧げられていたアルシュタート・ヤシュトに含まれている。この部分はステプリン・カーメンスキーの訳にはないので、筆者自身の訳を提出しておく。(ヤシュトXVIII, 4-6)：

《背が高く善良なアシは、王のために作られた美しい家に一步を踏み入れる。馬は千(倍)になり、家畜は千(倍)になり、有能な子孫たちも(またそうなる)。同様にティシュトリア星も、アフラマズダーによって作られた力強い風も、聖なるフワルナも動き出す。それらはすべてのよく育った美しい緑の植物に繁栄をあたえ、凍てつく寒さを退かせた…》

バクトリアやソグディアナ土着の宗教の信者のために仕事をしていたその土地の画家たちは、「絵画のアヴェスター」を創作しようとしていたのだ、と結論するのは正しくないだろう。しかし少なくとも我々が調査した例は、以下のことを示唆している。つまりアヴェスターのテキストのいくつかの部分、なかんずくヤシュトのいくつかは、彼等に絵を注文していた人々の文化の一部になっていたのと同様に、彼等自身の文化の一部ともなっていた。おそらくササン朝でもそうであったように中央アジアでも、土着の言語による何らかのアヴェスターのテキストと注釈が存在し、それらは単に神官たちだけでなく、ずっと広い範囲に普及していたのである。

---

(24) Belenitskii, A.M., Marshak, B.I., Azarpay, G., *Sogdian Painting*, Berkeley-Los Angeles-London, 1981, Fig. 8. 最も正確な複製が発表されている。



## 訳者注

(1) 本稿は Frantz Grenet の論文のロシア語訳 (Е.Ю.Полнский による) を和訳したものである。尚, F.Grenet 博士はこれと類似した問題を扱った論文を別に発表している。"Bāmiyān and the Mihr Yašt", *BAI* 7, 1993, pp.87-94.

論文の日本語訳を快く許して下さり、本訳文用に新たに質の良い写真と図版を送って下さった F.Grenet 博士、並びに ВДИ の編集長 Bongard-Levin 教授に対し心より感謝する。また翻訳にあたっては、神戸市外国語大学の吉田豊助教授より多大な指導をいただいた。深く感謝の意を表したい。

(2) ヤシュトの和訳にあたっては、Стеблин-Каменский の露訳をもとに原本も参考にして作成した。しかし新たに学術的な訳文を提出する意図はない。原語の片仮名表記は一般的と思われる表記に従った。一般的表記が確立していない場合は、発音に忠実に表記するように努めた。

(3) ВДИ に掲載された図版にはここで言うゴルゴンの顔は見えない。しかし Grenet 博士から提供された新しい図版ではそれがはっきり見えているので、この部分では原文の一部を変更して翻訳した。

(4) 形容辞 *barō.xvarenah* はウィーデーウ・ダート XIX, 37 の 1 節で使われているのみである。ヤシュト XIV, 2 には *baraḫ.xvarenah* という形がみられるが、これは普通「フワルナをもたらした」と訳されている。

## 略語

BAI —Bulletin of the Asia Institute, Michigan.

BSOAS —Bulletin of the School of Oriental and African Studies, London.

ВДИ —Вестник древней истории, Москва.

КСИА —Краткие сообщения Института археологии АН СССР,  
Москва.

НАА —Народы Азии и Африки, Санкт-Петербург.

СГЭ —Сообщения Государственного Эрмитажа, Санкт-Петербург.